2002年：ＡＳＥＡＮ政界の動向（上）

《タイ》国家開発党（ＣＰＰ）政権入りの波紋

タクシン首相（52）は最近、タイの抜本的な変革に10年は必要との見通しを示し、「（政権）２期目の終りなら60歳。その時には（自分も）時代遅れだろうから後進に道を譲る」として、２期８年は首相職を維持する意欲を表明した。しかし、それは首相個人、および首相が率いる与党第一党・タイ愛国党（ＴＲＴ）に対する国民の支持が持続すればの話だ。

アサンプション大学（Abac）が12月初旬に実施した世論調査によると、タクシン首相の支持率は48.2％と、2001年２月の就任後初めて５割を下回った。同じ調査で５月が71.9％、８月が52.3％だったことからも、首相の人気は尻すぼみの傾向にある。タクシン連立政権は、輸出や外国投資に頼らない経済構造への転換を目指し、農民債務の３年間の返済猶予などの内需振興策で経済回復に取り組んできた。タクシン首相は12月下旬に2002年の第２四半期には国内経済は上向きになるとの見通しを明らかにしている。しかし、Abac による調査では、「政府は半年以内に経済問題を解決できるか」という質問に、回答者の61％が「できない」と答え、「できる」の30.1％を大幅に上回った。

「ワン・ナム・ジェン」派とＣＴＰの動向

こうした状況下で浮上してきたのが、連立政権再編の動きである。まず、野党第二党・国家開発党（ＣＰＰ、党首：コーン前副首相〔56〕）の連立政権への参加で、これにはタクシン首相と個人的に親しいスワットＣＰＰ幹事長《ｐ》の根回しがあった。首相は12月中旬の訪米にスワット氏を同行させるとともに、訪米中の記者会見で「2002年の早い時期にＣＰＰが連立与党になっているだろう」と断言している。連立再編のもう一つの動きは、与党第三党・新希望党（ＮＡＰ、党首：チャワリット副首相兼国防相〔69〕）の解党と TRT への吸収合併で１月のＮＡＰ党大会で正式に決定するもようである。

TRT の下院（定数500）での現有議席数は263で単独過半数を確保している。与党第二党・タイ国民党（ＣＴＰ、党首：バンハーン元首相〔69〕）の41議席とＮＡＰの36議席と合わせて現連立政権の合計議席数は340。これにＣＰＰの28議席が加われば368議席となり、民主的な手続きで成立した政権としてはタイ政治史上まれにみる安定政権となる。これに対して、野党は民主党（Dem、党首：チュアン前首相〔63〕）127議席と民衆（ラサドン）党ら３小政党の５議席を合わせた132議席。ＣＰＰの参加で連立与党の議席数が下院の７割強に達することに対しては、タクシン首相が政権基盤の強化を狙っただけでなく、（与党の一部で出ている）憲法改正のために必要な351議席にこだわったとの見方がある。

もっとも、タイ政治に付き物のこうした理念なき「数合わせ」には必ず亀裂が生まれる。最近になってタクシン首相批判を展開しているバンハーン党首率いるＣＴＰが、ＣＰＰの連立参加と入れ違いに政権離脱する姿勢をほのめかしている。また、１月末にも予想される内閣改造（チャワリット副首相は2002年10月を主張しているが）では、ＣＰＰの与党入りに伴いコーンＣＰＰ党首に副首相ポスト、スワット幹事長に商務相か文相ポストが割り当てられるとの憶測が出ている。これに対して、ＴＲＴ内の有力派閥「ワン・ナムジェン」を率いるサノー同党最高顧問（元内相）《ｐ》が、これまで大派閥の割に閣僚ポストに恵まれなかったことの恨みが増幅されて、首相に造反する可能性もある。2002年初めのタイ政界はＣＰＰの与党入りに伴い、連立政権内でタクシン首相の強引な政治手法に反発する「抵抗勢力」が増大するなど波乱含みである。

■国家開発党幹事長　Secretary General, Chart Pattana Party（CPP）
スワット・リプパンロップ
Suwat Liptapanlop

国家開発党（ＣＰＰ）のタクシン連立政権入りを「お膳立て」した。「タクシン首相とは（1980年代末の）チャチャイ政権時代からの仲」（スワット氏）。タクシン首相も12月中旬の訪米に野党幹部の同氏を同行させた理由として「ベテラン政治家であり、米国と対等な交渉を行うのに必要な人材」と高く評価している。地元マスコミでも、（ＣＰＰ創設者・故チャチャイ元首相の甥である）コーンＣＰＰ党首よりも政治家としての実力は上との見方が多い。

スウィット教育相（ＴＲＴ：44）、チャトゥロン首相府相（ＴＲＴ：46）、アピシット前首相府相（Dem：37）らと同様、欧米で高等教育を受け、すでに閣僚経験が豊富なタイの「新世代」政治家に属す。46歳という若さの上に、学歴、財力、政界人脈のいずれの観点からもタイ政界で「最も将来を嘱望された政治家」（地元マスコミ）の一人とされてきた。1998年10月、チュアン内閣（当時）の改造で、野党第二党だったＣＰＰが連立与党入りした裏にも、同氏の根回しがあった。与野党を超えた幅広い人脈を持っていることもあり、前回（2001年１月）の総選挙前にも他党から「引き抜き」の誘いが多く、一時ＣＰＰ離党かとの噂も流れた。

父ウィット氏の経営するバンコクの大手建設会社「プラユーンウィット・カンチャン」の専務取締役でもある。同社は政府からハイウェイ建設事業を委託され大きく伸びた企業で、ともすれば同氏が「新世代」政治家でありながら、「利権誘導」政治を重視する守旧派体質も併せ持つと批評される理由になっている。六回生議員。

▼データ
【公職】下院議員
【政党】国家開発党（CPP）：幹事長
【年齢】46歳（1955年２月９日生まれ）
【学歴】カセサート大学工学部卒（土木工学）
米パードゥ大学で修士号（運輸工学）取得
【経歴】下院議員に初当選（1988）
1990：副運輸・通信相（チャチャイ内閣）
1992：副運輸・通信相（スチンダ内閣）
1994：科学・技術・環境相（チュアン内閣）
1996：［12月］運輸・通信相
（チャワリット内閣、－97年11月）
1998：［10月５日］工業相
（チュアン改造内閣）
2001：［１月］下院議員に再選
（CPP 比例第２位）
【横顔】
・同氏が政界入りしたのは、当初タイ万民党から総選挙に立候補を進められた父のウィット氏が健康上の理由で降りたためにその代役として。「富豪」といわれるリプパンロップ家の５人兄弟姉妹のうち、たまたま政治に関心を抱いたのが同氏だけだったからだ。
・88年の総選挙で初当選（タイ万民党）したが、その際ナコンラチャシマ県の選挙区で故チャチャイ元首相より多くの票を得て当選し政界を驚かせた。90年代の初期にアーティット大将に従い、タイ万民党を離脱し、正義団結党に入党。92年５月の民主化デモ鎮圧事件ののちに正義団結党が解散すると、チャチャイ党首の招きに応じて国家開発党に移籍した。

■タイ愛国党最高顧問　Chief Adviser, Thai Rak Thai Party(TRT)
サノー・ティエントン
Sanoh Thienthong

タイ愛国党(TRT)の下院議員263人のうち、主に東北・中部選出の60～70人で構成される「ワン・ナム・ジェン(Wang Nam Yen)」派の領袖。国家開発党(ＣＰＰ)の連立政権入りには、自派閥への閣僚ポスト数が減少したり、政権内での影響力が弱まるなどの理由から反発している。最近は野党第一党・民主党(Dem、党首：チュアン前首相)と接触するなどタクシン首相を中心とする TRT 主流派を牽制する動きにも出ている。

「ワン・ナム・ジェン」の動きは、過去に政界再編に発展したことが多い。同氏はいわば「造反」することで「キングメーカー」を演じてきた。1996年11月にチャワリット政権が成立したのも、その直前に当時の与党第一党・タイ国民党(ＣＴＰ：バンハーン党首)に属していた同派が与党第二党・新希望党(ＮＡＰ)のチャワリット党首と連携してバンハーン首相に造反したことが引き金になっている。チュアン前政権下では野党に回ったが、前回(2001年１月)の総選挙前に今度は NAP を離脱、タクシン党首が創設した新党ＴＲＴに参加し、総選挙でのＴＲＴ圧勝に大きく貢献した。同氏は現在のＴＲＴ最高顧問という立場には不満を抱いており、タクシン首相にプラチャイ現内相を更迭して自らを後任に就けるよう圧力をかけたりしている。首相は同氏の政治手法を知るがゆえに、「ワン・ナム・ジェン」派の影響力とのバランスをとる狙いでＣＰＰを政権入りさせた側面もある。あるいは、同派が離党してもよいとの思惑もあるかもしれない。それに対して同(サノー)氏がどう出るかが注目されるところである。

▼データ
【公職】下院議員
【政党】タイ愛国党(TRT)：最高顧問
【年齢】67歳(1934年４月１日生まれ)
【生地】プラチンブリ県
【学歴】シーパトゥム大学法学部卒(1995)
【経歴】(政界入り前)建設、小売りセンター、不動産等のビジネスを拡大
1976：国家行政改革評議会委員
1976：下院議員に初当選
1979：国家立法議会議員(任命制)
1986：副農業・協同組合相
(プレム内閣、－88)
1992：副運輸・通信相(スチンダ内閣)
1995：[７月] 保健相(バンハーン内閣)
1996：[12月１日] 内相
(チャワリット内閣、－97・11)
2001：[１月] 下院議員に再選
(CPP 比例第18位)
【家族】ウライワン(Uraiwan)夫人との間に１男１女
【横顔】
・1976年に政界入りしたベテラン議員(10回生)。地元では「ワン・ナム・ジェンのゴッド・ファーザー」との異名を持つ、東部プラチンブリ県の「チャオ・ポー(親分)」。長年にわたり東部の議員たちの選挙、財政面等の「面倒」をみてきた。同氏のこうした影響力は、カンボジア国境沿いのプラチンブリ、サケオ両県で持っている、建設業や材木業を背景にした絶大な財力を背景にしている。
・91年にチャチャイ政権を打倒した軍事クーデターの際は、軍政から「不正蓄財」の容疑で財産を押収されたこともある。しかし、92年３月にその軍政主導で成立したスチンダ政権に副運輸・通信相としていつの間にか入閣していたあたりは同氏のしたたかさを実証している。

[既出データ]
■タクシン・チナワット首相
(00/5/15、00/12/1)
■コーン・タパランシ前副首相(00/12/1)
■チャワリット・ヨンチャイユット副首相兼国防相(00/12/1)
■バンハーン・シンラパアーチャ元首相
(00/12/1)
■チュアン・リークパイ前首相(00/12/1)
■スウィット・クンキッティ教育相
(01/11/1)
■チャトゥロン・チャイセーン首相府相
(99/7/1)
■アピシット・ウェーチャチワ前首相府相
(99/7/1)
■プラチャイ・ピアムソンブーン内相
(01/3/15)

《マレーシア》与野党両陣営で内紛・分裂騒ぎ

2001年５月、マレーシアの治安当局は、過去３年にわたって国内の爆弾テロ、暗殺、強盗など多くの非合法活動に従事してきたイスラム過激派組織「クンプーラン・ミリタン・マレーシア(マレーシア戦士グループ)」(ＫＭＭ) の実行班を摘発した。続いて、８月からは国内治安法(ＩＳＡ)を適用してＫＭＭメンバーの疑いがある政治活動家18人を逮捕したが、そのほとんどが野党第一党である全マレーシア・イスラム党(ＰＡＳ、ファジル・ノール総裁〔64〕)の党員である。中にはＰＡＳ最高顧問であるニック・アジズ・クランタン州首席相《ｐ》の四男、ニック・アドゥリ容疑者が含まれている。ＰＡＳ首脳は過激派との関係を否定し、ＰＡＳ党員の逮捕は政府による野党弾圧だとして激しく反発。これに対して、マハティール首相(財務相兼任)は「彼ら(逮捕者)は暴力による政府転覆を謀った」として、ＰＡＳがテロ活動に関与していると非難した。

イスラム原理主義とＰＡＳ

９月11日の米中枢同時テロをきっかけに、与党連合・国民戦線(ＢＮ、総裁：マハティール首相)は、内外のイスラム過激派と連携しているとしてＰＡＳ批判を一層強めている。「(将来)断じてＰＡＳに政権を執らせてはならない。必ず後悔することになる。ＰＡＳ政権の下ではテロリズムやイスラム原理主義がさらに横行しかねない」(ザイヌディン・マイディン情報省政務次官)。ＰＡＳの政治思想はイスラム原理主義であり、ＰＡＳの本質に潜む怖さを多数派民族であるマレー人(イスラム教徒)の社会にアピールして同党支持層を切り崩そうという戦術だ。

しかし、米国のアフガニスタン攻撃でマレーシアでもイスラム教徒の同胞意識が高まったこともあり、こうしたＰＡＳ批判によって BN の中核政党・統一マレー国民組織(ＵＭＮＯ、総裁：マハティール首相)が先(1999年11月)の総選挙で(ＰＡＳの勢力伸張のために)失った地盤を回復できたかは疑問である。ＰＡＳが「イスラム同胞はいかなる方法によっても援助すべきだ」(ニック・アジズ最高顧問)と反欧米感情と宗教的情熱でマレー人に訴えたのに対して、政府は「マレーシア国民の(あるべき)立場は『アフガン問題には関与せず、介入せず』だ」(アブドゥラ副首相兼内相)との歯切れの悪い姿勢をとったからだ。

それでも、野党幹部の一部は、特にＵＭＮＯは米テロ事件の余韻が残る時期の方がＰＡＳを一気に封じ込めやすいと分析しているはずだと見て、政権側は2004年に実施予定の次期総選挙を今年(2002年)中に前倒しする可能性があると読んでいる。マハティール首相は12月中旬、そうした野党の読みを全面的に否定したが、次期総選挙前の首相・党総裁職からの退任とアブドゥラ副首相(ＵＭＮＯ副総裁〔62〕)への禅譲を示唆してきた首相だけに総選挙の時期はＵＭＮＯの内部事情にもかかっているといえる。

深刻化するＭＣＡの内紛

ＢＮ内部にも深刻な問題が持ち上がっている。本欄でも詳細を紹介(2001年８月1･15日合併号)した与党第二党・マレーシア華人協会(ＭＣＡ、総裁：リン・リョンシク運輸相〔58〕)の「南洋商報」紙買収問題を巡る内紛が党分裂の一歩手前まで来ているからだ。この問題は、ＭＣＡ傘下の投資会社が「南洋商報」などの発行元である「ナンヤン・プレス・ホールディングス」を買収したことに対し、リム・アーレク副総裁(前人材開発相)《ｐ》ら反主流派が華人市民団体などとともに「政党によるメディア介入は好ましくない」として激しい反対運動を展開したことが発端になった。現在のＭＣＡは、リン総裁を中心に２人の次席副総裁、幹事長、女性部長を含む主流派(「チームＡ」)と、リム副総裁、２人の次席副総裁、青年部長らからなる反主流派(「チームＢ」)の対立に地方支部をも巻き込んで抜き差しならない事態に陥っている。反

主流派の主張は、ただでさえNMNOがマレー人社会での支持者を減らしてきている上に、「(政治から独立した新聞を望む)華人社会との対決を選択すれば、BN は退陣の危機に直面する」(非主流派のチュア・ジュイメン次席副総裁)ということだ。マハティール首相も MCA の内紛を憂慮し、年末には対立する両派の調停に乗り出した。

ところで、2001年10月には従来UMNOを中核に13政党で構成されてきたBNに野党陣営から小政党のサバ統一党(PBS、ジョセフ・パイリン・キティンガン党首〔61〕)が「復帰」している。キリスト教徒のカダザン族を主体にするPBSは、1990年の総選挙直前に BN を離脱した経緯があり、一部のBN幹部には「裏切り者」との思いが残っていたようだが、マハティール首相は「バナナの木に実は2度ならない」とのマレーの諺を引用してPBSの復帰を受け入れた。

華人系DAPが野党連合離脱

一方、1999年にアンワル前副首相(服役中〔54〕)の逮捕をきっかけに野党の結束を目指して結成された野党連合・オルタナティブ(代替)戦線(BA)は、もともと政治思想が根本的に異なる政党が集まったグループだけに2001年になって崩壊し始めた。というのは、米テロ事件が発生した直後、野党第二党で華人系政党の民主行動党(DAP、リム・キッシャン議長〔60〕)が、イスラム国家建設を目指すPASとの路線対立を理由に BA からの離脱を決定したからだ。DAPは前回総選挙以来、同党のイスラム勢力との連携を嫌う華人系住民の支持を失っており、宗政一致の綱領を放棄しようとしないPASから決別しない限り支持基盤の回復は無理だとの結論に達した。アンワル前副首相のワンアジザ夫人(49)が率いる国民正義党(Keadilan)も、NGOなどに人気があるチャンドラ・ムザファル副総裁(54)が11月に退任するなど、今後党勢を大きく伸ばすような要素はない。Keadilan もこのままではPASに利用されるだけに終ることになる。

対立するBN、BA両連合とも次期総選挙への明確な戦略を欠き、内部にも矛盾や亀裂を抱えながら新しい年を迎えた。

■最高顧問

Spiritual Adviser(Mursyidulam)

ニック・アブドゥル・アジズ・ニック・マット

Nik Abdul Aziz Nik Mat, Datuk

2001年8月、イスラム過激派「クンプーラン・ミリタン・マレーシア」(KMM)のテロ活動に関与していたとして四男のニック・アドゥリ容疑者が治安当局に逮捕された。同(ニック・アジズ)氏は四男がアフガニスタン内戦時代の80年代に同国で活動していたことに関して、「イスラム教徒としては当たり前の活動だった」として今回の逮捕を全マレーシア・イスラム党(PAS)が掲げる宗教理念に対する迫害であると見なしている。

しかし、ともすれば、同氏のこれまでの言説は問題視されるものが多い。「州政府の男性職員の給与は女性職員よりも高くあるべき」、「イスラム教義に従えば、女性は家事に専念すべき」などの発言はアフガンのタリバンが標榜するイスラム原理主義に近いといえる。こうした発言はマレー人社会の一部でも「女性蔑視」だとして物議を醸した。

公職は、PASが90年以来州政府を担当するクランタン州の首席相。PASの党組織では、宗教(イスラム)面の最高顧問であり、政教一致の同党では政治面のトップであるファジル・ノール総裁より上位に位置付けられている。宗教指導者らしく、ファジル総裁に比べると、政治活動をイスラム布教のための「方便」と捉えている面が強いといわれる。

▼データ

【公職】クランタン州首席相
【年齢】69歳
【生地】クランタン州コタバル(州都)
【学歴】インド、パキスタンに留学
【経歴】PAS に入党(1967)
1978：PAS クランタン州責任者
1990：(PAS が州議会選で勝利)
クランタン州首席相(－現在)
【横顔】
・(野党連合・代替戦線〔BA〕の共同綱領にあえて「イスラム国家樹立」という言葉を入れなかったことについて)「良薬でも苦ければ人々は飲まない。我々はイスラムという良薬を糖衣錠にして提供する」(日本経済新聞とのインタビュー)

■マレーシア華人協会副総裁

Deputy President, Malaysian Chinese Association(MCA)

リム・アーレク(林亜礼)

Lim Ah Lek, Datuk

MCAによる「南洋商報」買収に反対した党内反主流派(「チームB」)のリーダー。1986年以来の長期在任になるリン・リョンシク総裁との権力抗争は数年来のものである。そこには、総裁職の後任を巡る問題も絡んでいる。自らが総裁に就任する時期を逸したこともあり、現在ではリン総裁が将来の総裁候補に推す主流派(「チームA」)のオン・カティン次席副総裁(住宅地方政府相〔45〕)に対抗して、「チームB」のチャン・コンチョイ次席副総裁(副財務相〔46〕)を後押ししている(「チームB」に属す他の党幹部には、チュア・ジュイメン次席副総裁〔保健相57〕、オン・ティーキエット青年部長〔副青年スポーツ相〕らがいる)。

自らは1999年11月の総選挙に出馬せず、90年以来務めた人材開発相からも退き現在は公職には就いていない。しかし、党の地方支部など草の根レベルでは広範な人気がある。修復が難しいほどに分裂したMCAではあるが、「チームB」を MCA から離脱させる考えはいまのところ持ってはいないようだ。マハティール首相による内紛調停の動きにも感謝の意を表し、「与党連合の力を削ぐようなことはいかなる MCA 幹部にもさせない」と理性的な対処をしている。

▼データ

【政党】マレーシア華人協会(MCA)：副総裁
【年齢】59歳(1942年7月17日生まれ)
【生地】パハン州クアンタン
【学歴】豪スリムバーン・テクニカル・カレッジ卒(経営学士)
【経歴】パハン州議会議員に当選(1974：3期に渡り続任)
同州執行委員会(EXCO)委員(－89)
同州政府村落委員会議長
1989：[4月] 下院議員補欠選挙で当選(MCA、ブントン選挙区)
[6月] 労相
1990：人材開発相(労相が改名)
1995：下院議員に再選
1995：[5月] 人材開発相に再任
1999：[11月] 総選挙に出馬せず、公職を退く
【党務】MCA に入党(1967)
1985：MCA 中央委員
1987：MCA 最高評議会議員(－現在)
1989：[4月] MCA 次席副総裁に任命
1993：MCA 懲戒委員会委員長(－現在)
1996：MCA 副総裁に選出(無競争)
【家族】アグネス・トー(Agnes Toh Li Guet)夫人との間に3女
【横顔】
・クアンタンの大富豪リム・エン氏の長男(5人兄弟)。32歳でパハン州議会議員に当選して以来、同議員を15年間務めた後、下院議員補欠選挙で当選し中央政界入りした。89年4月に、チャン・シアンスン氏の死去に伴いMCA次席副総裁に任命された(その後、90年の次席副総裁選では、最高票を獲得し、筆頭次席副総裁に就任している)。
・数年前から早期の政界引退を仄めかしてきた。96年にリー・キムサイ副総裁が引退した際にも、その後任への就任は望まないと見られながらも、支持者の強い要請で翻意し、「無競争」で副総裁に就任した。99年7月のMCA役員選挙でも、リン総裁が腹心のティン・チューペー幹事長(前住宅地方政府相〔58〕)を副総裁に就けるべく党内で根回しをしているとの噂があったが、「当分は政界に留まる」と宣言した同(リム)氏が無投票での続投を決めている。

［既出データ］
■マハティール・モハマド首相兼財務相(00/1/1・15)
■ファジル・ノール全マレーシア・イスラム党(PAS)総裁(00/7/1)
■ニック・アジズ・ニック・マット・クランタン州首席相(00/7/1)
■ザイヌディン・マイディン情報省政務次官(01/2/1)
■アブドゥラ・アーマド・バダウィ副首相兼内相(99/2/15)
■リン・リョンシク運輸相(01/8/1・15)
■チュア・ジュイメン保健相(01/8/1・15)
■ワンアジザ・イスマイル国民正義党(Keadilan)総裁(99/5/15)
■チャンドラ・ムザファル国民正義党(Keadilan)前副総裁(99/5/15)
■オン・カティン住宅地方政府相(00/2/1)
■チャン・コンチョイ副財務相(99/4/1)
■ティン・チューペー前住宅地方政府相(99/4/1)

《シンガポール》「閣僚予備軍」の国務相に７人の新人起用

2001年11月３日に投票が行われたシンガポール総選挙(国会定数84)は、与党・人民行動党(ＰＡＰ、書記長：ゴー・チョクトン首相)が82議席を獲得し圧勝した。野党はベテラン議員が２議席を死守しただけ。その上、PAP の得票率は前回総選挙(1997年)の64.98％を大幅に上回る75.29％だった。経済低迷の長期化を受け、与党の指導力に期待する有権者の心理が PAP の高い得票率に繋がったといえる。

「第三世代」のベテラン閣僚は留任

このように国民から絶大な信任を得たゴー・チョクトン首相(60)だが、11月17日発表の新内閣では主要閣僚の異動は最小限に留め、基本的には経済回復を目指す諸懸案に取り組むために前内閣からの一貫性を重視した。

閣僚(閣内相：17人)の顔ぶれの点では前内閣と比べてリチャード・フー前財務相(75)が引退し、デービッド・リム前国務相(45)が情報・通信・芸術相代行として実質的な入閣を果たした。リム新情報相と同じ二回生議員(「第三世代」政治家の「後発組」)であるリム・スウィセイ前環境相代行(47)が環境相に昇格。すでに閣僚経験が豊富なジョージ・ヨー商工相(47)、リム・フンキャン保健相兼第二財務相(47)、テオ・チーヒエン教育相兼第二国防相(47)ら40代後半の「第三世代」(先発組)はそろって留任し、次期政権で中枢を担う準備態勢に入った。

注目されるのは「閣僚予備軍」である閣外相で、(上級国務相を含む)計11人の国務相のうち７人を11月の総選挙で当選したばかりの一回生議員から抜擢するという異例の陣容になった。今期限りでの退任を言明したゴー首相は、次期政権での世代交代に備えて、短期間にこれらの新人を「第三世代」閣僚に続く指導者に育成する必要にせまられている。

その次期政権を率いることが「既定路線」になっているリー・シェンロン副首相《ｐ》は新内閣でフー氏の後任として財務相を兼任。ゴー首相は(2007年までに予定されている)次期総選挙に至る中間時期に大規模な内閣改造を実施すると言明しており、その時点で次期政権の世代交代に向けて明確な枠組みが示されるだろう。

■副首相兼財務相
Deputy Prime Minister, Prime Minister's Office & Minister for Finance
リー・シェンロン(李顕竜)(予備役准将)
Lee Hsien Loong, Brig-Gen(NS)

16年間財務相を務めた高齢のリチャード・フー氏(75)が引退したことに伴い、新内閣で財務相ポストを兼任することになった。1998年１月以来(中央銀行に相当する)金融管理庁(ＭＡＳ)長官の任にあり、新内閣では財務相がＭＡＳ長官を兼任する過去の慣例に復帰した。次期首相就任は「規定路線」とされているが、ゴー首相は新内閣の発足に当たって経済の回復状況次第で早ければ２年後にも首相の座を禅譲する可能性があることを示唆した。それが現実になるかどうかは、経済財政部門の文字通りの総括責任者として(同副首相)自身の今後の実績にかかっていることになる。

シンガポールの「建国の父」、リー・クアンユー上級相(前首相)の長男。英ケンブリッジ大学、米ハーバード大学に学んだだけでなく、両校を優秀な成績で修了した「超エリート」。米国で陸軍参謀課程も修了。英語に加え、マレー語、中国語、ロシア語にも通じるというマルチ・リンガルでもある。国軍に入隊し、29歳で大佐に任官。1984年に32歳で准将に昇進した後、政界入りした。87年に商工相に就任。90年に38歳という異例の若さで第二副首相(商工相兼任)に昇格。

シンガポールにおける「第三世代」政治家のリーダー格。同世代の閣僚には、ジョージ・ヨー商工相、リム・フンキャン保健相兼第二財務相、テオ・チーヒエン教育相兼第二国防相がいる。

▼ データ
【現職】副総理大臣兼財務大臣
【政党】人民行動党(PAP)：第一副書記長
【年齢】49歳(1952年２月10日生まれ)
【人種】華人
【学歴】英ケンブリッジ大学卒業(数理経済学、数理統計学：最優秀成績)(1974)
同大学コンピューター科学終了(優等)
1978：米カンザス州フォート・リーベンワースで陸軍参謀課程修了
1979：米ハーバード大学で修士号(公共行政学)取得
【経歴】陸軍参謀次長(作戦)(1981)
1982：同参謀長
1983：国軍統合参謀会議(Joint Staff)作戦計画本部長
1984：［９月］准将に昇進後、国軍を退役
国会議員に初当選(PAP)
国防省政務秘書官
1985：商工・国防担当国務相
(リー・クアンユー内閣)
1986：商工相代行
1987：商工相兼第二国防相
1990：［11月］第二副首相兼商工相(ゴー・チョクトン内閣)
1992：［11月］商工相兼任を解かれる(ガン治療のため)
1993：［８月］副首相
1998：［１月］金融管理庁(MAS)長官兼任
2001：［11月23日］財務相兼任
【趣味】ジョギング、水泳、読書、コンピューター
【家族】病死したウォン・ミンヤン前夫人との間に１男１女。再婚したホー・チン現夫人との間に１男。現夫人も同(リー)氏同様、ケンブリッジ大学を最優秀で卒業した才媛である。
【横顔】
・92年11月、悪性リンパ腫に罹患していることが公表され、化学療法を受けたが、１年後の診断でガンが所見されなくなったために職務に完全復帰した。93年８月、政権 No. ２である(唯一の)副首相の座に就いた(95年にトニー・タン氏が民間から閣僚に復帰し、副首相兼国防相に就任したのに伴い、二人副首相体制に戻っている)。

［既出データ］
■ゴー・チョクトン首相(01/4/15)
■デービッド・リム情報・通信・芸術相代行(01/12/15)
■リム・スウィセイ前環境相代行(01/12/15)
■ジョージ・ヨー商工相(98/12/15)
■リム・フンキャン保健相兼第二財務相(01/1/1・15)
■テオ・チーヒエン教育相兼第二国防相(98/12/15)
■トニー・タン副首相兼国防相(00/12/15)

(アジア政治アナリスト 勝田 悟)